

黎志添主編『道藏輯要・提要』

酒 井 規 史

近代的な道教研究において一番参照されている文獻は、いうまでもなく明代に編纂された『道藏』と『續道藏』であろう。唐代以來、歷代の王朝が『道藏』を編纂してきたが、我々が完全な形で目にするのができるのは明代のものだけであり、道教研究の主要な資料として不動の地位を占めてきた。

『道藏』所收の道典について研究の蓄積がなされたのち、文獻の解題集も登場した。その嚆矢となったのが中國で出版された任繼愈主編『道藏提要』（中國社會科學出版社、一九九一年）であり、その後いくつかの解題集が

出版されている。近年ではKristofer Schipper氏が中心となつて編纂された“The Taoist Canon（道藏通考）”（University of Chicago Press 2004）が代表的なものとしてあげられよう。『道藏』に收録される文獻には出自や年代が不明確で議論の對象になっているものもあり、各解題は全ての研究者の合意を得たものではないが、文獻研究の入り口として大きな役割を果たしてきたといえよう。そしてこのたび、それらの明代の『道藏』の文獻解題集に續いて、本書『道藏輯要・提要』が出版された。清代における道書の叢書のうち、最大級の規模をほこる

『道藏輯要』の文獻解題集である（以下、本書を『輯要・提要』と略稱する¹⁾）。

『道藏輯要』は、清代の嘉慶年間、北京の覺源壇を據點とする扶乩結社に所屬する、エリート官僚の蔣予蒲らが中心となつて編纂したものである。彼らは呂祖（呂洞賓）からの啓示を受け、「全藏の精華を擷み、前藏の遺漏を補う」（『道藏輯要』原序）ことを目的として、明代の『道藏』から道書を選び、さらに（彼らが信奉する呂祖に關するものなど）『道藏』未收錄の道書を合わせて叢書を完成させた。その後、光緒年間には、成都の二仙庵の道士である閻永和が發起し、彭瀚然や賀龍驤らが協力して『道藏輯要』の再編集が行われた。そして、文獻を増補した上で刊行されたのが『重刊道藏輯要』である²⁾。

『道藏輯要』と『重刊道藏輯要』（以下、前者を原刊本、後者を重刊本と稱す）は清代道教における重要な資料集であると同時に、その成立の事情や流通の過程じたいが研究對象ともなつてきた。いわば清代道教研究の重要なトピックでもある。この『輯要・提要』はそれらの研究

成果を反映してできたものである。

また、近年、清代から近現代にかけての道教についても關心が高まり、研究も活況を呈してきた。必然的に清代に編纂された文獻が多く利用されることになり、明代の『道藏』に收録されていない道書についても研究の蓄積がされている。さらに、原刊本編纂の背景にある呂祖信仰や扶乩結社の研究が進んだことも、本書の刊行をうながしたといえるであろう。

それでは、黎志添氏と麥谷邦夫氏による序文にもとづき、本書の出版に至る経緯を簡単にまとめてみよう。二〇〇五年、京都大學の Monica Esposito 氏（以下、エスポジト氏と稱す）が、三つの柱をもった『道藏輯要』の研究プロジェクトを構想した。第一に『道藏輯要』のデジタル化、第二に點校本の出版、第三に文獻解題の作成と出版である。同じく京都大學の麥谷邦夫氏と Christian Wittern 氏もその趣旨に賛同し、研究環境を整えたうえで、各プロジェクトが進められることになった。そして、多數の道教研究者も解題の作成に協力を約

束した。⁽³⁾

しかし、二〇一一年、プロジェクトが完遂しないうちにエスポジト氏が急逝してしまふ。その後、黎志添氏がエスポジト氏の遺志を継ぎ、香港中文大學に據點を移して『道藏輯要』研究プロジェクトが進められていくことになった。最終的に、上記の文献解題作成のプロジェクトが今回の『輯要・提要』として結實したのである。

『道藏輯要』の解題集を編纂するにあたり、黎氏は王宗昱、Kim Jihyun、Elena Vallus、Vincent Goossaert、麥谷邦夫、Paul Katz、森由利亞、Franciscus Verellen、Christian Wittern、劉迅、Urs Appの各氏をメンバーとする編集委員を組織した。このメンバーの中には清代道教の研究をリードする研究者が含まれており、本書が近年の研究成果を積極的に反映しようとした意圖が見て取れる。

また、解題の作成には、ベテランから若手もふくめて、中國、香港、臺灣、韓國、日本、マカオ、シンガポール、イタリア、イギリス、フランス、オランダ、ドイツ、ア

メリカなどから總勢七十四名の研究者が参加しており、このことからプロジェクトの規模の大きさがうかがえるよう（なお、京都大學が研究據點だったこともあり、日本からも多數の研究者が参加している）。

前置きが長くなったが、以下に『輯要・提要』の内容を見ていくことにしよう。まず主編の黎志添氏による「總述・『道藏輯要』與『重刊道藏輯要』考證」において、二つの『道藏輯要』の出版過程やその背景、各種版本の關係が述べられる。⁽⁴⁾ この「總述」は、從來の研究に加えて黎氏の知見を加えた『道藏輯要』研究の總まとめであり、これを讀むことで『道藏輯要』について包括的な知識を得ることができるであろう。

また、『道藏輯要』原刊本の歴史的意義についても黎氏は總括している。明代までの『道藏』と違い、原刊本は傳統的な正一教と全眞教とはちがう背景を持ち、道觀を據點とする宗教職能者である道士が編纂の主體ではないことに黎氏は注目する。そして、清代において道士以外の知識人層にも道教信仰が廣まったこと、在家信者に

よる扶乩信仰が盛り上がったこと、この二つの流れが結實したのが嘉慶年間に刊行された原刊本であると指摘する。これは、清朝から既存の道教は冷遇を受けたものの、在家の信者たちの活動はむしろ活発であったという觀點を提示し、清代は道教の停滞期とする通説を批判するものである。

では、肝心の解題について見てみよう。筆者の見たところ、本書の解題の體裁は上掲の『*The Taoist Canon* (道藏通考)』をモデルにしているようである。『道藏輯要』に收録される文獻三百七種はエスポジト氏の考案した番號(略稱JY)によって整理され、各解題の冒頭には文獻名と卷數(または版本の葉數)、『道藏輯要』における收録箇所、さらに、藏内道書(明代の『道藏』に收録されている道書)・嘉慶『道藏輯要』新增藏外道書(原刊本にみえる道書)・『重刊道藏輯要』増補藏内道書(重刊本で増補された『道藏』收録文獻)・『重刊道藏輯要』増補藏外道書(重刊本で増補された道書)という區分が示される。

本書の各解題の記述方法は完全に統一されているわけ

ではないが、基本的には「書題解釋」「作者介紹」「內容概要」「版本出處」といった項目を立てながら、各文獻の書誌と內容の解説がなされている。各項目の筆者が明記され、參考文獻も提示されていることは、本書の信頼性を高めているといえよう。

なお、解題の枠を超えた小論文ともいえる項目もいくつかあり、『元始天王大洞玉經疏義 (JY8)』(擔當はKim Jinyun氏。以下カッコ内は擔當者)、『高上玉皇本行集經合註 (JY87)』(謝聰輝氏)、『太上靈寶淨明宗教錄 (JY152)』(郭武氏)、『孚佑上帝十六品經 (JY159)』(Philip Clart氏)、『孚佑上帝天仙金華宗旨 (JY161)』(Monica Esposito氏)、『孚佑上帝語錄大觀 (JY168)』(黎志添氏)、『白海瓊真人集 (JY186)』(橫手裕氏)、『天仙正理直論增註 (JY23)』(長澤志穗氏)、『張三丰先生全集 (JY237)』(謝世維、Pierre-Henry de Bruyn、秋岡英行の三氏合作)、『玉詮 (JY244)』(Judith Bolz氏)などは、擔當者の研究成果が反映された力作である。ただし、その一方で簡潔にまとまった解題もあるため、全體を通してみるとバランスが

とれていないように感じられるのが少々残念である。

なお、二種の『道藏輯要』に収録されている文献のうち、約三分の二は明代の『道藏』から採録されたものであり、これらの文献についても新しく解題が作成されている。『道藏』所収の文献のごく一部分ではあるが、従来解題よりも詳細なものとなっていることにも注目すべきであろう。

『道藏』所収の文献についても、『高上神霄玉清真王紫書大法 (JY122)』（擔當はPoul Andersen氏。以下カッコ内は擔當者）、『葛仙翁肘後備急方 (JY146)』（Michael Stanley-Baker氏）、『雲笈七籤 (JY243)』（中嶋隆藏氏）、『太上洞真智慧上品大誡 (JY267)』（池平紀子氏）、『西山群仙會真記 (JY305)』（Lannett Gesterkamp氏）など、長編の解題が収録されており、読みごたえがあるものとなっている。

さらに、以上に述べた解題の正文に加えて、「附録」として七篇の道書に解題が附されている。これらは光緒年間刊行された重刊本には収録されていないが、のち

に重刊本に増補されたと思われる（もしくは重刊本と同じく二仙庵で編纂され、密接な関係を持つ）文献があげられている。これも最新の研究成果を反映したものである。最後になるが、本書は書名・事項索引をはじめ、各種のインデックスが充實していることも特筆すべきであろう。各解題や『道藏輯要』に關する様々な情報にすぐにとどり着けるように工夫されているのは、讀者にとって非常にありがたいことである。

本書『輯要・提要』は、二種の『道藏輯要』だけでなく、清代およびそれ以後の道教研究の基礎となる書物であり、道教研究者および關連する研究機關にとっては必携のものといえよう。また、主編の黎氏が述べるように、本書は多數の研究者が總力を結集して編纂されたものであり、現段階での道教研究の到達點を示すものとして研究史上に記憶されるであろう。

なお、上述したように清代以降の道教研究が進んでいるが、明代の『道藏』以後の道教文献の出版や流通についてはまだまだ未解明の部分が多い。⁽⁵⁾ 本書『輯要・提

『要』を足がかりとして、清代道教文獻の研究、さらにはそれらを利用した道教研究が進展するのを祈念しつつ筆をおくことにしたい。

(全三冊、計二〇七二頁、二〇二二年五月、

香港中文大學出版社)

註

(1) 本書刊行後まもなく、黎志添氏から日本道教學會に本書を寄贈していただいた。本稿はその寄贈書を拜讀して執筆したものである。この場を借りて、黎氏の弊會に對するご厚意にお禮申し上げる。

(2) 『道藏輯要』原刊本と重刊本の編纂事業とその背景については、森田利亞『『道藏輯要』と蔣予蒲の呂祖扶乩信仰』（『東方宗教』第九十八號、二〇〇一年）、同氏『重刊『道藏輯要』と清朝四川地域の宗教』（中國古籍研究所編『中國古籍流通學の確立』所收、雄山閣出版、二〇〇七年）を参照。

(3) Monica Esposito “The Daozang Jiyao Project: Mutations of a Canon” (『道教研究學報：宗教・歴史與社會』第一期、中文大學出版社、二〇〇九年) は、生前の同氏が『道藏輯要』の研究プロジェクトの概要を述べ

たものである。

(4) 『道藏輯要』の原刊本と重刊本は、雙方ともに細かな違いのあるいくつかのバージョンが存在し、複雑な出版の経緯をたどっている。『道藏輯要』の各種版本については、本書の黎氏による「總述」のほか、註3上掲のエスポジト氏の論考、垣内智之・池平紀子「道藏輯要版本考」（平成二十年度～平成二十三年度科學研究費補助金基盤研究（A）『『道藏輯要』と明清時代の宗教文化』研究成果報告書』所收。以下のURLで公開されている。
https://researchmap.jp/ikehira/published_papers/22522984/attachment_file.pdf：二〇一三年八月閲覧）を参照。

(5) 註2前掲の森氏の研究で明らかにされているように、『道藏輯要』の原刊本・重刊本はともにやや特殊な背景を持って編纂されている。そのため、原刊本には明代の『道藏』で多數を占める儀禮書があまり收録されておらず、重刊本では四川に關する道書が増補されるなど、選書にも獨特の傾向が見られる。清代に流通していた道教文獻の全體像を把握するためには、さらなる文獻研究が求められよう。